

大学出版

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

*特集

大学で本をつくることを問い直す

中島隆博

1

本の行方

木下正高

8

理系にとってこれから本は必要か？

前田晃一

14

「知の変容」から「知の始まり」へ

小松美加

16

理系編集者のつづやき

大学出版部ニュース

19

No.115

2018.7

夏



一般社団法人
大学出版部協会

Japan
Univ
Pre

No.
201
Sum

大学出版部協会 新刊ご案内

ブックレット第4弾

対立を乗り越える 心の実践

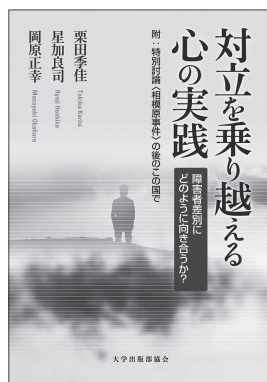
障害者差別にどのように向き合うか？

栗田季佳・星加良司・岡原正幸

大勢の障害者の命が奪われた〈相模原事件〉を起こす影は、私たちの内にある。制度や「ねばならない」的教導では、差別はなくなるない。「潜在化する偏見」を炙りだし、その原因となる心のメカニズムと社会的背景にまで遡って考察することで、差別解消への糸口を考える。

[発行：大学出版部協会／発売：東京大学出版会]

ISBN978-4-13-003153-0 2017年2月刊行
A5判／88頁／本体1,000円＋税



主要 目次

- 第1章 見えない偏見
障害者を取り巻く問題に現れる心の動き（栗田季佳）
- 第2章 バリアフリーという挑戦
「社会を変える」ことは可能か（星加良司）
- 第3章 生の問題として〈対立を乗り越える〉を考える（岡原正幸）
- 第4章 討論
対立を乗り越える学問の挑戦（栗田季佳・星加良司・岡原正幸）
- 第5章 特別討論〈相模原事件〉の後のこの国で
有事モード下の差別と偏見

特集＊大学で本をつくることを問い直す

本の行方

中島隆博
(東京大学教授)

本を読むこと、本を書くこと

本を読むのは孤独な作業なのだろうか。もしくは、本を書くことは孤独な作業なのだろうか。そうだ、と答えたくない。読書をしているときに、時折訪れるあの至福の瞬間を思い出してみよう。体中に満ちてくる興奮が、次の頁をめくることがためらわれる。孤独の底で、自分一人で噛みしめる幸福である。執筆をしているときにも、書くべき道がさつと開けて、手が追いつかないことがある。ゾーンに入った瞬間であろうか。そうした時には、誰にも話しかけられたくないものだ（ただ、そんな時は滅多にないのだが）。
とはいえ、その孤独は決して閉じたものではない。本を読むことは、その著者と対話することであり、さらには、その著者が対話してきた別の著者たちとの対話に入ることでもあるからだ。本を書く時もそうだ。過去の著者たちと

の対話の結果、ことばが自分を通して生まれてくることに他ならないからだ。

小川洋子さんはわたしの好きな作家の一人で、「現代作家アーカイブ」というプロジェクト（飯田橋文学会と東京大学そして東京大学出版会によるプロジェクトで、作家に三冊の本を選んでもらって、それを一緒に読みながら、インタビューをするもの）の一つとしてお話をうかがった時に、大変興味深いことをおっしゃっていた。「読むことがイコール書くことであって、書いているとまた読みたくなるし、読んでいるとまた書く必要を感じるようになる」、「もう一歩踏み込んで言うと、誰かが書いたから書いている。わたし以外の誰かが先に書いていて、それを読んでわたしは書いている。書いた人がいたから、書いている」。

ここで語られている書き手は、近代的な作者というイメージからはやや外れたものだ。小川さんは、それを、ニュ

ートリノが降ってくるブルのような場所だとも語っておられた。孤独ではあるが、宇宙を含むすべてに開かれた場所であるブルとしての書き手。ひよっとすると、こうした書き手は、かつての集団文芸としての連歌や俳諧を担った人々のようなものかもしれない。あるいは、前田勉『江戸の読書会 会読の思想史』（平凡社、二〇一二年）が明らかにした、江戸時代の会読（儒学の經典を共に読んで、その読解の優劣を競うもの）に集った人々でもあるかもしれない。そうした読書人たちと彼女らが集う場所は、ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換』（未來社、一九九四年）のいう「文芸的公共圏」（コーヒーショップやサロンに集って、文学作品を媒介にして討議をする公共圏）を形成する重要な要素であった。

本離れと現代の連歌

そうだとすると、昨今のいわゆる「本離れ」をどう考えればよいのだろうか。若者を中心に本離れが進んだから、本が売れない、とりわけ、大学出版が関わっているような学術書は深刻で、なかなか採算が取れないという嘆息があとちこちから聞こえる。

なるほど、確かにそうでもあるのだろう。以前、大学の新入生の授業を持っていた時に、高校時代に何冊ぐらい読んだことがあるかを数年にわたって尋ねたことがあった。千冊のオーダーで読んでいる学生はほとんどおらず、百冊

のオーダーで数名、十冊のオーダーが一番多く、しかしゼロ冊というケースもかなりあった。それは受験勉強で時間が取れなかったということが大きな要因だと、学生たちは説明していた。では、大学に在学中は飛躍的に読むようになったかという、必ずしもそうはならず、授業で指定された本ならば読むというケースが珍しくないようなのだ。ある先生が文学部の学生に、「最近どんな小説を読んだんですか」と尋ねたところ、「それはハラスメントの一種です」と答えられて、困り果ててしまったと聞いたことがある。学生であれば当然に小説を読んでいるはずだという文化的な圧力がそこにあるというのだ。

とはいえ、別のところでは、若者がSNSで発信してそれが多くの人に共有されることを、現代の連歌だと捉える向きもある。さきほどの、「小説は読むべき」という文化的な圧力を嫌う若者であっても、インターネット空間での連歌創作には加わっていると考えようとするものだ。確かに、電話での声の直接的応酬から、インターネット空間での文字の間接的応酬へとという大きな変化がこの二十年ほどの間に生じていて、総量で見ると、文字での発信量は飛躍的に増えているはずである。

そうであれば、小川洋子さんが体現しているような、読み手でもあり書き手でもあるような作家というイメージは広く共有されていることにもなる。「文芸共和国」の理想が決して減じたわけではない。

とはいえ、それが近代的な本という形式をなおも必要としているかどうかはわからない。インターネット空間での現代的連歌で十分であって、編集者による編集の過程と、物理的な（いや身体的なといった方がよい）紙による印刷と装幀の過程は過剰であると思われるかもしれないからだ。それらは文化的圧力とはいわないにしても、かなりの熱量を有した文化的な装置であることは間違いないからだ。

学術書とは

では、近代的な作家性がより必要とされる学術書においては、どのような事情があるのだろうか。

自然科学的な論文執筆と評価の作法が、大学での学問の前提条件となつてしばらく経つ。わたしのような人文社会科学に属する者は、そうした作法への適応が問われ、時にかなりの葛藤を抱えることがある。その葛藤の中心になるのは、本という形式がもはや不要だということだ。ジャーナルがランキング化され、有名なジャーナルに載った査読

つき論文の点数が高いというシステムの中では、日本語で本を出すということに点数はつきにくいからだ。

ただ、英語で有名な海外の大学出版から単著を出すことには点数がつけられるので、本という形式それ自体がまったく無意味だというわけではない。しかし、英語で単著を出すためには、英語圏の学術の文法と査読のシステムにおいて品質保証がなされる必要がある。日本語での学術書の出版が苦しいのは、実は、学術内容を評価する権威のあり方が大きく変わってしまったことにも一因がある。

要するに、学術論文や学術書のオーサーシップ（作家性、著者性）が依存してきた近代の大学における知のオーソリティー（権威）のあり方が変わってきており、それとともに本という近代的な形式もまた揺さぶられている、ということではないのだろうか。そうすると、本を軸にした知の近代的な共有は、これからいっただうなってしまうのだろうか。

道なき道を歩く勇気を

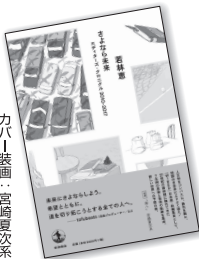
さよなら未来

エディターズ・クロニクル 2010-2017

若林 恵

四六判 本体2200円

テクノロジー、ビジネス、メディア、音楽など、二一世紀の最前線に触れてきた気鋭の編集者（WIRED前編集長）による、思索と発信の軌跡を集成。



カバー装画…宮崎夏次系

未来にさよならしよう。
希望とともに。
道を切り拓こうとする全ての人へ。
——tofubeats（音楽プロデューサー／DJ）



岩波書店

東京・千代田・一ツ橋
（定価は表示価格＋税）

<http://www.iwanami.co.jp/>

本の身体

ここで考えてみたいのは、本の身体性である。本は決して透明な媒体ではない。それは質量を有し、重く、折れ曲がり、棄損され、書き込まれ、時に燃やされる身体を有している。このことは、近代の本であれ、前近代の本であれ、変わることはない。そしておそらく未来の本でも変わらないうだろう（ただし、ヴァーチャルな空間での本が登場すれば事情は少し変わるかもしれない）。

そのような身体性を有した本と関わるとはどういうことなのだろうか。日本哲学の研究者であるトマス・カスリスさんは次のような興味深い観察をしている。

事態の現実をインテグリティ・モデルであらわすなら、書物は独立した存在物としてどこかの図書館に並べられ、私の著作には外的なかわりしがなく、その相互のつながりを考え出すのは私の仕事ということになる。このように考えると、間テクスト性は環境的である。つまり、書物は私の著作を中心とする状況、すなわち「周りに「立つこと」(circum-stance)」として、私を取り囲むのだ。

間テクスト性をもつとインティミットに捉えるなら、この環境的な説明は、いくら正しいとしても勘所を外していることになる。これまで示唆したように、私の

インティミットな書誌のなかの書物は私を取り囲んでいる。そうではなくて、私の一部なのだ。それらの書物——実際には書物ではなく、書物を私が読んだということ——は、私に所属するのではなく、私とともに所属しているのである。それらは私の相互依存的なアイデンティティーの一部なのだ。私と私の書物とは互いに親しい関係にある。したがってインティミットな書誌は生態的であって環境的ではない。それは自分の慣れ親しんだ場所の青写真なのだ。こうした書誌は書物を私がそれらを読んだときの状況から切り離せないし、書物の思想が——読むのが初めてかもしれない場合でも——ついには急所に響いたという経験からも切り離せない。（トマス・カスリス『インティマシーあるいはインテグリティ——哲学と文化的差異』、笠正晃訳、高田康成解説、法政大学出版局、二〇一六年、二六一頁）

人と本の関係はインティマイトなものではないのか。インテグリティ（統合的で、距離をとった客観性を重んじる）の立場からは、人が本をモノとして所有すると言いうるのだが、インティマシー（親密で、わかちあいを重んじる）の立場からは、本が人の身体の一部となっていると言った方がしっくりくる。

もしこの観察が当たっているとすれば、本の身体と親密

に關与するインティメイトなあり方は、近代の作者的なインテグリティ、さらには現代の自然科学的な作法からは、かなりずれることになる。それは、より小川洋子さんのな、もしくは連歌的なあり方に接近するのだ。

そうすると、「人文社会科学的な学術書」というあり方は、矛盾しているか、不可能だということになるのだろうか。いや、そうではない。まさにカスリスさん自身がその著作を通じて問うたように、インティマシーとインテグリティを繋ぐこと、あるいは翻訳することこそが、「人文社会科学的な学術書」の意義だからである。それは、複数の原理と複数の言語を、この身体（人間と本）において生きるという実践である。図式的に言うことを許されるならば、インティマシーからインテグリティへ、そしてその先にある二つの往還という知のあり方が、本の身体を通じて見えてきているのだ。

本のソムリエ

小川洋子さんは、もう一つ重要なことをおっしゃっていた。それは、「本とは窓である」というものだ。その窓を通じて、わたしたちは別の世界を覗くことができる。これが重要なのは、本を読み、本を書くことが、人間の交容に深く関わっていることを示しているからだ。とりわけ、インティメイトな本との関係は、心身ともに人を変化させてくれる。それは、本が消費されるだけの単なる情報ではないということをお願い出させるものだ。たとえどれだけ強力なインテグリティを有していても、本を通じて交容すること、人が生きることにとってどれだけ大きなのか、ということだ。

しかし、そのためには、どうしても本に關与してくれる友人が必要だ。その友人の目がなければ、時にわたしたちは実に不自由な方向へと自らを変容させることもあからだ。

「蓋然性」の探求

古代の推論術から確率論の誕生まで
フランクリン 古代の法典から
保険、賭博まで、不確実性に取組
む知の歴史を発掘。確率の前世
を塗り替える。南條郁子訳 ¥6300

免疫の科学論

偶然性と複雑性のゲーム

クリルスキー 仕組の解説を超
えて、複雑な免疫の総体に迫る。
コレージュ・ド・フランス講義発
の新しい学。矢倉英隆訳 ¥4800

兵士というもの

ドイツ兵捕虜盗聴記録に見る
戦争の心理

ナイツェル／ヴェルツァー 画
期的史料に見る軍の実体。各国
に衝撃を与えた歴史学と心理学
の共同研究。小野寺拓也訳 ¥5800

憲法9条へのカタバシス

木庭 顕 カタバシス＝時間軸を
廻り、2項「戦力不保持」から通説
を覆すポップズ論までローマ法
学者が見透す9条の構造。¥4600

エコラリアス

言語の忘却について

ヘラー＝ローゼン 忘却は創造
である。「流離」こそが言語哲学
の核心であると明かす、言語哲学
の最重要書。関口涼子訳 ¥4600

コリアン・シネマ

北朝鮮・韓国・トランスナショナル
イ・ヒャンジン 植民地期以来の
代表作を社会学的に分析。南北
両方のコリアンのアイデンティ
ティを探る。武田珂代子訳 ¥6000

ハリウッド映画と聖書

ラインハルト 時代を映す200
作品を聖書学者が分析。清教徒
が建国した米国文化の底流を鮮
やかに見せる。栗原詩子訳 ¥4800

東京文京本郷

2丁目20-7

tel. 3814-0131 fax 3818-6435(税別)

www.ms2.co.jp

みすず書房

その友人のことを、本のソムリエとあえて呼んでみよう。

その日のゲストの調子に合わせて最良のワインを提案するソムリエのように、本にもソムリエが必要である。何のことはない、かつて批評家と言われていた人たちのことである。その人々が「文芸共和国」を支えてきたのである。ただし、現代の批評家としての本のソムリエには、より多くのことが求められている。とくに、具体的な読者に寄り添いながら、別の世界を垣間見るチャンスを準備することは重要である。

たまたま先日、東浩紀さんのゲンロンにお招きいただく機会があった。フランソワ・ジュリアン『道徳を基礎づける』を十五年ぶりに再刊し、そこに東さんの帯をつけてもらったご縁によるものだ（絶版になった同じ本が、何と重版になりました）。ゲンロンという「文芸共和国」を作り上げ、維持していることに驚嘆することは勿論であったが、それ以上に、百名を超える聴衆と、ネット配信を通じて対談を見てくれているより多くの聴衆に対する東さんの細やかな配慮に感心させられたのである。解釈の権威を独占したかのようなかつての批評家ではなく、公共圏を開き、そこに読者を誘い、読者に新たな経験のチャンスを提供するといふ、新しい批評家である。

おそらく、東さんという本のソムリエが選んだワインに、当日立ち会った聴衆のみなさんは陶然とされたことだろう。無論、もっとも陶然としたのは、わたしであったのではあ

るが。

おそらく、このような本のソムリエというあり方に、今後の本の行方は大きく左右されるのだろう。東さんが作家でもあり、編集者でもあり、批評家でもあることを思い出しておこう。それは近代的な分業とは根本的に異なるものだ。いや、考えてみれば、近代においても、本に関してはそのような分業は表面的なものであって、実のところは、すべてが入り組んでいたのかもしれない。

それはともかく、腕利きの、いや味利きの本のソムリエなしには、今後の本、とりわけ人文社会科学の学術書はありえないのではないだろうか。もしそうだとすれば、編集という仕事はますます重要な意義を持つことになる。編集者もまた本のソムリエであって、身体を有した本とともに生きるはずだからである。

自然科学的な作法で書かれる論文と、本という形式を有した書籍（とりわけ学術書）の違いは、まさにそこにある。後者は複数のオーサーシップと、複数のオーソリティーからなるものであって、読むことと書くことが、読者であり未来の作者でもある人に開かれているのだ。

本の行方

最後に、本という方がきわめて危険であることを、あらためて指摘しておきたい。まるで現代詩のような散文である『野草』の中で、魯迅は次のようなやり取りを書い

ていた。

「読めますとも。だいじょうぶです」（魯迅「死後」、丸尾常喜『魯迅『野草』の研究』、東京大学東洋文化研究所／汲古書院、一九九七年、三二一―三二二頁）

「こんにちは。先生お亡くなりになったんですか」
耳なれた声がした。眼を開けて見ると、なんと勃古齋古書店の外回り店員だった。二十数年も会っていないのに、昔のままで。私はまた六面の壁を見てみた。まったくもってざらざらしている。かななを全然かけていないのも同然で、鋸で挽いた跡のけばだちがのこったままで。

「かまいませんよ。だいじょうぶです」彼はそういうしながら、濃紺の布包みを開いた。「これは明版の『公羊伝』で、嘉靖年間の黒口本です。先生におとどけにきました。どうぞ取っておいってください。これが……」

「きみ」私は怪訝に思って彼の眼を見つめていった。「君はいつた正気かね。こんな有様になって、明版など読むと思うのか……」

死んだ後であつても取り憑いてくる本。何という強烈なイメージであろうか。むせかえるような物質性あるいは身体性が本にはあり、それは人を安らかに眠らせてくれない。本は簡単には消えていかないのだ。それは、古典中国文学の不朽を嫌い、速朽（速やかに朽ちること）としての近代中国文学を目指した魯迅にとつては、取り憑いてやまない亡霊のようなものだ。近代とは、そのような亡霊を打ち、人間を解放するプロジェクトでもあった。

とはいえ、魯迅もまた、本という身体を通じてそれを行うほかなかったのである。亡霊を打つものとしての本。本を亡霊化させることなく、新しい世界を開く窓にし続ける努力が、今後の本の行方を定めることだろう。

新 刊 案 内

岩崎俊夫 著 社会統計学の伝統と継承

論点と関連論文(1959-60)

社会統計学の成果を、蜷川統計学・経済統計研究会の活動通し紹介。

日山紀彦 著

価値と生産価格

社会的物象化論を視軸にして読み解く

『資本論』に軸足を置いて哲学的な方法論的視座から検討・吟味しなおす。

◎戦没者は「カミ」か「ホトケ」か、靖国祭祀の再検証

今井昭彦 著

菊判五三〇頁 本体八八〇円

対外戦争戦没者の慰霊

敗戦までの展開

戦没者の慰霊がいかに顕彰へと展開したか、忠魂祠堂、忠霊塔の分析。

今井昭彦 著

本体七六〇円

反政府軍戦没者の慰霊

今井 勇 著

本体五〇〇円

戦後日本の反戦・平和と「戦没者」

遺族運動の展開と
三好十郎の警鐘

御茶の水書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20
電話03-5684-0751
<http://rr2ochanomizushobo.co.jp/>

特集＊大学で本をつくることを問い直す

理系にとって、これから本は必要か？

木下正高（東京大学教授）

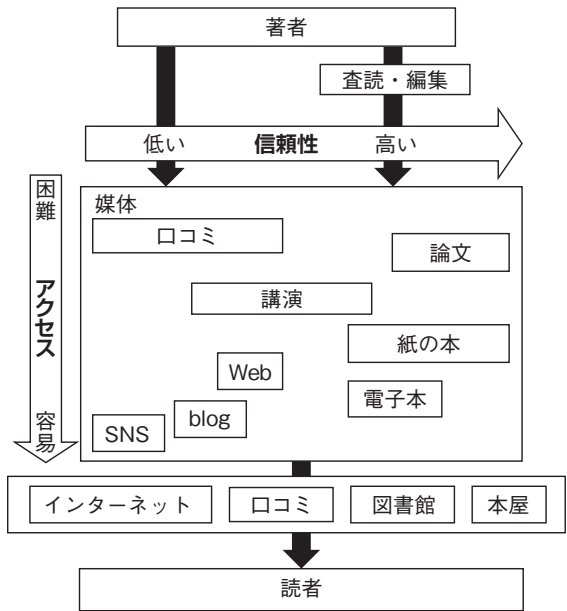
はじめに

通勤電車の中では、ほぼすべての人がスマホに見入ったり、指体操をしている。膨大な量の情報収集、あるいはLINEなどで情報交換を行っているはずだ（ゲームもあるが）。LINEを打つ彼らの目にもとまらぬ指さばきは、芸術ではないかと感動する一方、彼らは最近本や紙に印刷したものをじっくり読んでいるのだろうか、とも思う。

人類の歴史で、文字の発明から始まり、グーテンベルクが活字を発明、さらに最近のデジタルメディア・インターネットの発達により、社会における知の共有・継承能力が飛躍的に増大した。またクラウドにより、世代を超えた長期保存も道が見えたと思われる。情報（内容）を収集する、情報を後世に引き継ぐという意味では、本の役割は終わつたような気がする。

では本はもはや不要なのか？ それを考えるには、読み物（頭脳への入力手段）と、書き物（他者への出力手段＝成果物）に分けて考えるべきだと気づいた。これまで大学出版部協会主催の研修会などで討論をした際には、書き物としての本とか論文を主に考えていた。オリジナル研究成果を発表する際、理系は査読付き雑誌に論文を投稿するし、おそらく文系は本として著すのが主流だろう、というのがベースにあった。どちらも、原典に当たる、仮説検証を丁寧に行うなど、時間がかかる作業である。

しかしながら、読者あつての本である。読者としての私は（あるいは理系の研究者は）、これから本が必要だろうか。以下、理系にとっての本の役割について、よたよたと考えたことを述べる。図に、入力・出力とその媒体の関係を整理してみた。この他にもいろいろあるだろうが、「本」と関わりの深いものとして選んだ。関係性としては、その



本をめぐる関係図（木下の独断による）

信頼性を横軸に、アクセスの容易さを縦軸に取った。図の右下にあるものほど「よい」というつもりである。

「読み物」としての本

理系の研究者は、日々の研究で本を必要とすることはあまりない（と思う）。論文を読むことで精一杯であるし、論文を書く場合に引用すべきなのは、基本的には（原著）論文だからだ。一方、教育用に本を使うことは多いし、専

門外のことを手っ取り早く学ぶのにも本は役に立つ（でも最近はWebで検索してしまうが）。つまり、研究を進めるノウハウとか、入口の部分では体系的に書かれた本は必要である。一方現役で研究している人はノウハウは身についているだろうから、必要な情報の入手先としては、本よりもインターネット、ではないか。

情報収集は、もはやインターネットなしではありえない時代となった。しかし、情報は収集しただけでは価値がない。ユーザーがそれぞれのニーズに基づいて情報を組立て、解釈することで、情報がそのユーザーにとって意味を持つ。

その「情報組立のための方法論」を、研究者は若い時代に学んでいるはずだが、そのためには体系的に学ぶための本が必要だ。学生時代、ゼミでの勉強会には、必須の教科書がありそれを学んだ。論文では細かい手法は書いていないので、実際の手法が分かるという意味では大変ありがたかった（今でもありがたい）。また研究者としてのキャリアを重ねても、他分野の勉強には本が便利である。一人の人間が統一したコンセプトでまとめたものなので、それを読めば（その人によるその分野観ではあるが）全体像が分かる。

モノグラフという本がある。あるテーマにそって、関連する論文を集めたもの、あるいはテーマにそってレビュー論文を皆で書いたものである。これは、体系的であると同時に査読論文である、という点で、うまく構築できていれば有用である。私も活用している。

一つの体系が、散逸せずに物理的に一つに綴じられているのは、それを手に取りさえすれば何とかなる、という信頼につながる。さらに、本棚とは自分の脳内マップを他人（あるいは自分自身）に開陳するものであり（内田樹『街場の読書論』）、研究を進めるにあたつての自分の背景を俯瞰することができて便利である。

「書き物」（成果物）としての本

理系にとつて、自分の就職、キャリア構築、コミュニケーションへの貢献、を目的とした成果物の出力先は「査読付き英語論文」に尽きる。専門家集団の仲間に入るには、論文があることが必須（あとは科研費を持つていること、とかも重要だがここでは関係ない）。

一方、自分の研究分野の集大成として、また社会に対するアウトリーチとしての「普及本」として、理系の先生も本を書く。これは大学の教科書として使われることが多いが、「読み物」で述べたように、他分野の研究者などへの導入として重要である。論文の特集号として雑誌一卷を丸ごと一つのテーマに充てる企画とか、前節で述べたモノグラフの企画を行うことも重要である。本を読んで学ぶだけでなく、本を書くことにより自分自身の当該研究分野を体系的に理解できる（〃人に教えることで本当に理解する〃）、ということも重要だ。教科書を書く体験は、どの研究者もやるべきだと思う。そのためのサポートを出版社はぜひ行

ってほしい（気を付けないと、同じような内容のものが何冊も出てしまうのは問題ではあるが）。

自身の研究内容をWebサイトやblogで紹介する人も多い。これは他の研究者だけでなく、自分自身にとつても極めて有用である（〃昨日の自分は他人〃なので）。必要に応じて、自分の業績一覧を更新したり、新たなアイデアを小出しにするなど、理系に限らずネットならではのメリットであり、本では太刀打ちできない。ただこのような手段は、論文や本を書く上での作業の一部として扱うべきだろう。少なくとも仲間の研究者は「それら」を成果物とは見てくれない。

これから本が必要か？

どうやら、理系にとつて「本」は一定の価値を持つようだ。「論文」「雑誌」「Web」でなく「本」に期待するのは、その体系性・網羅性・信頼性である。自分の分野以外の分野を概観するためには便利で、それさえ見ておけば、概ねその分野の領域はカバーできていると「安心」できる。そのような性質を担保するのが、出版社の編集者の目である。売れなければ彼らの生活がかかるのだから、その厳しさは「査読」の比ではないのだろうと想像するし、そもそもSNSのような書きっぱなしとはスタートラインが違うのは明らかである。従って、きちんと編集（マーケティング）の目の届いた本は、これから必要であり続けるだろう。一

〈日本のモノ作り〉をあらためて見直す。

モノと技術の 古代史 全4冊

木器編…宇野隆夫編／金属編…
村上恭通編／陶芸編…小林正史編
各6000円 (続刊)漆工編

景観史と歴史地理学

金田章裕編 編者に賛同する研究者が、様々なテーマから歴史地理学の可能性に挑む。11000円

中世荘園村落の 環境歴史学

東大寺領美濃国大井荘の研究
海老澤 衷編 災害と戦禍を乗り越え、輪中城下町の形成に向かう姿を分析する。9500円

絵図と徳川社会

岡山藩池田家文庫絵図をよむ
倉地克直著 国絵図・城下図…。何がどのように描かれたか。絵図利用のあり方をさぐる。4500円

羽賀祥二編 — 各11000円

近代日本の 歴史意識

記憶と「記念」に関する問題、歴史意識や郷土意識を論じた12論考。

近代日本の 地域と文化

11論考を「学術と宗教」と「地域社会と都市」に編成し諸相を探る。

帝国日本の 外交と民主主義

酒井一臣著 外交に民意は必要なのか? 「外交と民主主義」の関係を開いて直す! 7500円

現代日本の 葬送と墓制

鈴木岩弓編
森 謙二 3800円
イエミき時代の死者のゆくえ
誰が、どのように葬るべきか。ゆらぐ
現代の葬儀・墓事情を考えるために。

吉川弘文館

〒113-0033・東京文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151／価格は税別

方デメリットは、アクセスの悪さ、陳腐化、そして、理系研究者の時間（エフォート）を使うのに見合った対価が少ないこと、であろうか。アマゾンですら、配達に二〜三日もかかるではないか。

本の必要性を、一日の使い方の観点から考えてみる。まず仕事中。講義や実習には本が有用であることは言うまでもない。加えて、周辺分野を手取り早く学ぶ種本として重宝する。そして、行き帰りなどオフの時間の使い方としては、スマホをみるか、ゲームをするか、寝るか、本を読むか、論文を読むか、中吊り広告を眺めるか、思索にふけるか、PCで仕事をするか、スマホでメールをするか、といったところだろう。その中で、狭いスペースで十分思考作業を進める（知を蓄積する）のに十分な性能を有するのが本（電子本でもよい）であると思う。無論娯楽として読む小説などもよい。PCは一番いいのだが、隣の人の肘が気になってよろしくない。

では、これから「紙の本」が必要だろうか？ この問題

は『脳を創る読書』（酒井邦嘉）で詳しく論じられている。正直「苦しい」面もあるが、一つ納得したのが、書いたものの校正は紙媒体のほうがやりやすい（間違いを発見しやすい）こと、という部分である。このような些細なことが、研究など「深い思考」を伴う作業には、実は本質的ではないか。ざっくりと全体を見通したり、一度じっくり読んだ本を後で見返して活用する場合には、紙媒体のほうが手取り早い（同著）。私は、体育館など、広い部屋一面に本のページが並べられていて、自由に飛び回って眺められる状態が「理想的」だろうなあ、などと想像する。

本に何を求めるか

私が「論文」に求めるのは、新しいアイデア、ということも大きいですが、主には新しいデータの享受という面が大きい。プレートテクトニクスを「証明」する大きな要因となった海洋底拡大説を裏付けた「地磁気縞模様」では、海底の磁場が中央海嶺を軸として見事に左右対称になったイメ

ージを見て、息をのむ思いをしたものである。

研究者たるもの、自分の分野では皆自分自身の世界・観
点・仮説を持つていて、それを検証してくれるデータを常
に求めている。自分で取りに行くのがベストだが、誰かが
取得したデータも活用すればよい。運が良ければそれらの
データから自分の「新説」や high profile の雑誌に原著論文
が掲載、時の人という首尾である。既往データをいじくり
まわして「解釈」をいろいろ述べる、というのは、学生実
習としてはいいが論文として面白くない（そもそも査読を
通らない）。中途半端な解釈（＝implication）を記述し、あと
は皆さんでやってください、という論文を誰が読むだろう
か（自戒の意味を込めて書きました）。

本も同じで、具体的なデータとして、実際の例を紹介す
る部分が面白い。「量子電磁力学」でノーベル物理学賞を
受賞したファインマン教授は、物理学の理論やモデルを考
えるとき、何か実体のあるもの（ボールとか）を頭に浮か
べているそうだ（ファインマン『冗談でしょう、ファイン
マンさん』）。彼の本でよく出てくるのは、数学や理論が得
意の秀才が、実際の現象（光の偏光とか、三脚の丸テーブ
ルのどこに寄り掛かればテーブルが倒れやすいか、とか）をう
まく解けないケースである。

教科書でもマニュアルでも、私がつとも活用するのは
「例」である。ソフトの使い方が分からないとき、
HELP がたいいて役に立たないのは、私の「検索」キー

ワード設定が悪いのも原因ではあるが、法律用語のよう
に厳密な「定義」はあるのに、実際の活用例がないからで
はないか、いつも感じている。固体地球科学者の間で「標
準」の地図描画ソフト「GMT」は、ハワイ大学の研究者
が作成・維持している無料のソフトだが、HELP の最後
に必ず実例がいくつも掲載されていて、大変便利である。

分野外の人が読んで学ぶ本（啓蒙書など）では、イント
ロが卑近な例で始まる割には、ある所から突然難しくなっ
てお手上げになることがまある。書いている人は、例を
上げたりして「懇切丁寧に」説明しているのだろうな、と
は思う。やはりその専門分野の「村人」が持つ知識（スペ
シャリスト暗黙知、コリンズ『我々みんなが科学の専門家の
か？』は相当なものがあ、それを暗黙の前提として解
説するので、門外漢はあるところで突然分からなくなるの
ではないか。となると、その分岐点のところをきちんと把
握して解説をしてみよう「翻訳人」が必要ということにな
るが、そんな大変なことができるのだろうか。

翻訳といえば、外国語の教科書にはいいものが多いが、
やはり読むのに骨が折れる。翻訳本がほしい。売れなけれ
ばだめだろうが、きちんと日本語にされた翻訳があると、
それは英語を読むよりは早く理解できる（一目でわかる）。

終わりに

理系にとって、読み物としても書き物としても、本の居

藤原書店

奇妙な同盟 I・II

ルースベルト・スターリン・チャーチルは、
いかにして第二次大戦に勝ち、冷戦を始めたか
J・フェンビー ビッグ3の虚々実々
の駆け引き! 河内隆弥訳 各2800円

プーチン

外交的考察

木村汎 プーチンは世界をどう捉
えているか? 〈人間篇〉〈内政篇〉
に続く三部作が完結! 6500円

敗走と捕虜のサルトル

戯曲「バリオナ」敗走・捕虜日記「マチュウの日記」
J-P・サルトル 処女戯曲と捕虜
時代の第一級史料、本邦初訳!
石崎晴己 編訳・解説 3600円

釈伝 空海 ㊦㊧

西宮紘 史実と伝説を融合し、
謎に包まれた空海の生涯を一貫
して描き出す、わが国初の本格
的「釈伝」、遂に完成! 各4200円

百歳の遺言

いのちから「教育」を考える

大田堯・中村桂子 「ひとつくり」
ではなく「ひとなる」を目指す教
育に、希望を託す。 1500円

風 魂 Kazatama

パンの笛に魅せられて

岩田英憲・西村恭子 パンフルー
トの演奏ひとすじに——珠玉の
詩文集。 序・渡辺俊幸 2200円

もう「ゴミの島」と言わせない

豊島産廃不法投棄、終わりにき闘い

石井亨 撤去を求める住民運動
に身を投じた渦中の人物が、そ
の歴史を内側から描く。 3000円



B6変32頁 4月号 No.313

黒田杏子/木村汎/宮脇
淳子/赤坂真理/新保祐
司/石田紀郎/坂本宮尾
/春山明哲/平川祐弘/海勢頭豊/加藤
晴久/中西進/中村桂子/横佐知子 12名

年間購読料2000円(送料込) ◎見本
誌・ブックガイド呈 ＊表示価格税抜

〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町523
振替 00160-4-17013 TEL 03-5272-0301
ホームページ <http://www.fujiwara-shoten.co.jp/>

場所はあるだろう。専門書の役割は、体系的に学ぶ、知識や思考過程の構築、自分の知識のアウトソース(辞書替わりに何度も見るといったことなので、体系的に書かれていなくてはならない。網羅的でなくてはならない。丁寧でなくてはならない。中途半端な説明はだめ、ある解析方法を説明するのに、概要だけかいて、個別の式の導出は「関連文献を参照されたい」というのでは、その本を座右に置く意味が薄れてしまう。私はこれで何度挫折したことか。無人島で活用できるものでなくては。結局、出会いのものであるから、それを求めて読み続けて、書き続けていくしかないのだろうなあ。遠い道のりだなあ。

文献

内田樹『街場の読書論』、太田出版、二〇二二年

酒井邦嘉『脳を創る読書』、実業之日本社、二〇二二年

リチャード・P・ファインマン『「冗談でしよう、ファインマンさん」、岩波書店、一九八六年

ハリー・コリンズ『我々みんなが科学の専門家なのか?』、法政

大学出版局、二〇一七年

特集＊大学で本をつくることを問い直す

「知の変容」から「知の始まり」へ

前田晃一（法政大学出版局）

今回の研修会のゲストにお迎えした木下正高先生の「本は必要だろうか？」という問いかけに、私は「大学で本をつくることを問い直す」ことから応答できると考えた。

二〇一三年、京都大学で全学部の研究者を対象に「貴方の領域では、業績として論文と著書のどちらを高く評価しますか？」という学内一斉アンケートが実施された（京都大学学際融合教育研究推進センター『異分野融合、実践と思想のあいだ』、ユニオン・エー、二〇一六年、六二頁）。その結果、人文・社会科学では、論文Ⅱ二一・二%、著書Ⅱ三四・二%、同等に評価するⅡ四四・二%。他の領域で著書の評価するだけを見ると、自然科学Ⅱ一・三%、工学Ⅱ四・〇%、医学・薬学Ⅱ〇・七%である。「人文・社会科学では、著書を高く評価する人の割合が高い」とコメントがあるが、総合大学の人文・社会科学の研究者の間でさえ、著書は業績として積極的な評価を得ていないと見るべきだろう。

しかし、そもそも評価とは既存のディシプリンに拘束されるものだ。そこで、この質問にある「貴方の領域」、すなわち、「学問領域」^{ディシプリン}の問題が問われる。その問題のひとつに研究分野の増加と細分化の弊害があるだろう。このアンケートを実施した京都大学学際融合教育研究推進センター（CIPHER）の宮野公樹氏は、細分化に至った理由に「論文主義」「専門主義」「相対主義」の三つを挙げているが、最も深刻な問題は、「研究者同士が知性を競い合う土俵が減少している」ことにあると言う（同前、九三―九五頁）。こうした問題に対応する研究制度として「学際（interdisciplinarity）」（前掲書の「異分野融合」、京都大学の「学際融合」、東京大学の「超域」の英訳もこれである）があるのだろうか、例えばマサオ・ミヨシは「複数の学問領域にまたがること（interdisciplinarity）」では学問領域は元のままであるが、それとは全く異なり、それぞれの学問領域が消え去り、別の

考え方と融合する「超学問領域 (trans-disciplinary)」こそが知の始まり、だと述べている(マサオ・ミヨシ+吉本光宏『抵抗の場へ』、洛北出版、二〇〇七年、および、マサオ・ミヨシ「大学、宇宙、世界、そして「グローバルリゼーション」」、拙訳『季刊 a t』十号、二〇〇七年を参照。強調引用者)。

今回の研修会のもう一人のゲストである中島隆博先生は多くの著書を書いている。最初の単著は、外国語でしかも多言語で書かれた *The Chinese Turn in Philosophy* (Tokyo: UTCP, 2007) であり、単著、編著、共著、翻訳書と、本の関わり方も多様である。もちろん論文もあるし、博士論文になった本もある。専門は中国哲学ということになるだろうが、しかし中島先生の「学問領域」はそれに留まらない。留らないのは細分化して増加しているからではなく、それとは違う動きをするからだ。「大学という場所」は、異なる種類の知が体系化され、集積化され、拡散、流通していく場所であると研修会で中島先生は述べていたが、まさにご本人が、そしてその本も、そうした場所のようなのだ。

本を書くことは研究者や編集者、目の前に見えない読者、過去のあるいは未来の読者との共同作業であり、そこには絶えず何かに対する *engage* がある、と中島先生は言う。それは拘束や従属よりは、従事すること関与し、他者を引き込むことだろう。また、大学出版と本の関係について、近代的な大学の知の条件の変容とともに本の出版の形式も変容するが、大学とともにある大学出版という活動には、

大学の知の変容、そのものに介入する、新たな批評的関係の構築可能性がある、とも言及されていた。この指摘は、本をつくることに関わる私たちのディシプリンにとって非常に重要だろう。例えば、博士論文で考えてみよう。「本」は博士論文として評価され、論文博士になることはできるが、博士論文を元にした本を著者とともにつくるのは、三割ほどの評価のものに変えるのではなく、本という *engage* が生み出す新しい何かのために必要だからだ。

ここで「評価」に関連して私の経験を記しておく。二〇〇七年から、東京大学共生のための国際哲学教育研究センター(UTCP)で小林康夫先生のリーダーシップのもと、前述の中島先生の単著をはじめ複数の研究者の単著を外国語で「本」(ISSN付き、逐次刊行物)として刊行した時、ペーパーや抜刷の交換はインパクトが違う何かが「本」を軸にして出現し、何かが始まるという実感があった。

今年四月、明治大学文学部はその創設以来初めて、「哲学専攻」を新設した。その発足記念シンポジウム(レポートは同専攻のサイトに掲載)にも登壇した中島先生はトマス・カスリスの *Engaging Japanese Philosophy* (Univ. of Hawaii Press, 2017) 南山大学南山宗教文化研究所との協力のもと刊行)を引きながら、*engage* の重要性をあらためて強調されていた。そして、この専攻は五月に『いま、哲学が始まる。 明大文学部からの挑戦』(明治大学出版会)を刊行した。

大学という場で新しい挑戦は本とともに、いつでも始まる。

特集＊大学で本をつくることを問い直す

理系編集者のつぶやき

小松美加
(東京大学出版会)

東大図書館でのブックトーク

そもそのきつかけは、東京大学附属図書館の新図書館計画の一事業として企画されたトークイベントに、第一回目の文学部の先生と小会編集者とのブックトークが成功したので、今度はぜひ理系の先生と理系編集者でのブックトークをお願いしたいという要請をいただいたことだった。

「本」について話してほしい、と言われたが、理系の研究者にとつては査読付き英文論文が何をおいても最優先だし、フィールドや実験でお忙しそうだし、書く側としても読む側としても、どこまで「本」について話が弾むのか、かなり不安です、と正直に申し上げた。図書館の担当の方には、そういう文系と理系の違いもわかると面白いです、と言っていただし、それではどなたに頼もうかと考えたときに、木下正高先生のお顔が浮かんだ。

木下先生は近い将来に大きな被害が予想される南海トラフ巨大地震の解明に向けて現在進められている南海トラフ地震発生帯の科学掘削において、中心的な役割を果たされており、二〇〇九年に木村学先生との共編で『付加体と巨大地震発生帯——南海地震の解明に向けて』という学術書を執筆・編集していただいていた。掘削計画が進行する中で、地球物理学、地震学、地質学、シミュレーション科学、など多彩な研究者からなる研究チームが到達した研究成果は、当然それぞれ学術論文にまとめられ発表されていたが、それを隣接分野の人が読んでもわかるようにわかりやすく書いてもらい、一冊にまとめ、次世代に向けて残された課題と今後の展望を示そうと考えた。どんどん細分化・専門化していく学問のなかで、総合的な視点をもって大きな課題に取り組んでいく大切さも本から読み取ってほしかった。その目的はどこまで読者に届いたかはわからないが、

現在も進行中の南海トラフ科学掘削計画に若い研究者が参加するひとつのきっかけにはなったのではないかと思う。

その木下先生のような、地球という大きな相手に地球深部探査船「ちきゅう」号で挑み続ける研究者にとつて、「本」とはどんな意味を持つのか、ぜひ聴いてみたかった。また本掘削計画は国際共同プロジェクトであり、全世界から集まった研究者たちによる、基本英語での世界である。そのような国際的なチームの首席研究者として研究計画をリードしてきた立場からも、日本語の本の意味をどうとらえているのか、も興味があった。

さて、当日は「ちきゅう」号での研究生生活の様子をスライドで紹介していただいたり、木下先生が若いころ読んだ本の話題などで盛り上がりつつが、「教科書や概説書は確かに必要だが、はたして理系の研究者に本は必要だろうか」という図書館でのトークイベントとは思えないような（失礼）本質的な疑問点が木下先生から飛び出して、図書館や聴衆の方々はかなりびっくりにしてしまい、それが本特集号

のもとになった「大学で本をつくることを問い直す」という大学出版部協会編集部会研修会のテーマにつながった。

結果として、本号の木下先生の論考にもあるように、遠い道のりにせよ読み物としても書き物としても本は必要だ、とおっしゃっていただけたし、外国の教科書には良いものが多いが日本語翻訳のほうはやはり理解が早いとおっしゃるのも実感だろう。とはいえ、情報収集手段としてはインターネットなしではありえないこの時代、果たして「本」はこれからどうなっていくのだろうか。

理系分野の編集の特徴

最初に、理系編集者から見た理系分野の編集の特徴を（独断にて）挙げておく。

まず先に書いたように、理系の研究者にとつて査読付き英文論文の執筆が最優先であり、書籍の執筆はなかなか優先位が上がらない。そういった研究者にいかにも本を書いてもらうか、である。はい、論文が第一優先なのはわかり

ラーメンの歴史学

ホットな国民食からクールな世界食へ

バラク・クシュナー 著

幾島幸子 訳

ラーメンは東アジアの歴史が

溶け込んだ小宇宙なのだ。

ケンブリッジ大学の「ラーメン博士」がラーメンの歴史を縦横無尽に論ずる。 四六判 / 2500円



社会情動的スキル 学びに向かう力

経済協力開発機構 (OECD) 編著
ベネッセ教育総合研究所 企画・制作
無藤隆、秋田喜代美 監訳

人生の成功に結びつく社会情動的スキルを特定し、育成するための方策を整理する。
A5判 / 3600円



21世紀東南アジアの 強権政治 「ストロングマン」 時代の到来

外山文子、日下渉、
伊賀司、見市建 編著

なぜ強権的な指導者が人びとに選ばれるのか。その背景と影響を検証する。 四六判 / 2600円



明石書店 〈価格・税別〉
図書目録送呈
東京都千代田区外神田6-9-5
Tel.03-5818-1171 Fax.03-5818-1174

まず、でも後進にとっては体系的に、日本語でまとめられた一冊が必要なのです、または、世の中に不正確な情報が広がっています、きちんとした学問成果に基づいた入門書がないといけません、などと説得を重ねる。

第二に、いまや大学の先生方は理系文系を問わず超多忙であるようだが、とくに理系の研究者は、長期にフィールド調査に出かけたり、実験室に昼夜通してこもったり、なかなか机の前に座ってじっくり執筆する時間が取れない。

「僕に一日だけ何も用事がない日をもたえればすぐに書けるんですが……」とよく言われる。どうやって執筆の時間を確保してもらうか。毎日少しずつでも書き進めてください、など、細切れにでも書ける著者ならよいが、まとまった時間がないと、と言われる著者には難しい。ホテルに缶詰め、などという金銭的・時間的余裕は、ない。

さて、一口に理系といっても、分野によって本の寿命に大きな差がある。数十年前の数学の教科書がいまだに必読書のトップに挙げられる一方で、進展著しい分子生物学では数年おきに分厚い翻訳の教科書が改訂されている。木下先生のご専門の地球科学分野では、一九六〇～七〇年代にプレートテクトニクスというパラダイムの変換があった。分野によって「本」の持つ意味も微妙に違ってくるだろう。

発表メディアの変化と「本」として出す意味

情報収集・発表のメディアとして、インターネット上に

は様々なサイトがある。学術発表の場としても、インターネットでの学術情報リポジトリ、研究者個人のウェブサイト、オンラインジャーナルはもちろん、オープンアクセスジャーナルなども盛んで、多様な場が用意されている。

こうした状況の中で「本」として出す意味はどこにあるのだろう。日々移り変わり流れていく情報の波の中で、紙の上に固定された形で残すことの意義は何だろうか。インターネット上の情報は、画面上で自由に修正してどんどん最新のものに瞬時に更新できる。ＩＴ関係の著者と仕事をしたとき、とにかくリリースして後からバグをとればいいんです、という考え方だったのでとても驚いたことがある。

これは理系文系を問わない一般論になるが、編集者は最初の読者である、とよく言われる。著者と読者をつなぐ役割として、本の世界では、編集者という伴走者が著者に寄り添い、本の構成から書き方やレイアウトまで、よりわかりやすく、著者の意図が一番よい形で読者に伝わるように、繰り返し質を高めていくプロセスが存在する。確かに理系のとくに辞典的なものは、検索機能も付いた電子書籍の形をとることが増えるだろうが、電子書籍であろうとも、このプロセスは同じである。そういったプロセスの結果としての「本」、インターネット上を日々流れていく「情報」、その違いは今後より鮮明になっていくのかもしれない。

大学出版部ニュース

表示価格は税別です。

二〇一八年度定時社員総会を終えて

五月二五日にアルカディア市ヶ谷で協会の定時社員総会が開かれたが、営業部の全国的なブックフェア展開など、今年が協会創立五五周年にあたるための事業計画もいくつか報告されている。思えば協会の歴史も浅くはなく、発足当初は「大学紛争の影響が残り、協会の活動もほぼ停止する」の一文が年史の中にあって、草創期には苦労したことがよくわかる。しかしそれから一〇年後の七八年には各校の図書目録を集めて合本にして発送したところがあるので、徐々に事業の共同化が進み、八月には札幌市定山溪で夏季研修会が開かれ、東大出版会から「学術出版の課題」、東販北海道支店長の「北海道の流通事情」、九大出版会の「キースタディ」などが報告されている。他にも一五周年の全国縦断ブックフェアや記念懇親会、「一五年の歩み」作成など、ようやく活動の足跡が見えてくる。

八八年になると、『大学出版』第五号が刊行され（九〇年まで同誌は年二回の刊行）、六月には第三回編集・営業合同研修会が箱根で開かれ、この頃すでに「電子出版について」の報告主題がみえる。また同月三〇日には盛大な「二五周年記念と感謝の会」がアルカディア市ヶ谷で

催され、当時の文部大臣ほか各大学の学長・総長や団体トップなど三〇〇名もの参加者を集めている。このころは国際交流活動も活発になって、七月にアルカディアで最初の日中大学出版部協会合同セミナーが、一月には第七回日韓合同セミナーが韓国慶州市で開催されている。こうしてみると当時は協会の第一世代が充実に入り、活力を発揮したのではないだろうか。

九八年には、創立時に八大学二団体の加盟だったのが、二三大学に増え、前年に長野諏訪湖畔で第一回日韓合同セミナーが開催されたのを受けて、この年は北京で第二回日韓合同セミナーが開催された。これは通称三国セミナーと呼ばれて、第一四回まで続いていく（但し中国の実質的参加は一二回までで、その後は日韓の二国セミナーに戻る）。今年が協会五五歳だとしたら、この頃は働き盛りの壮年期で、当時は出版業界も成長の頂点にあった。協会は生体ではないからその後老化の途をたどることはなく、むしろ時代のデジタル化、ハイブリッド化の変化の渦中であって、更なる進化を遂げていくべき存在であろうと思われる。直近の五年間の慌しい足跡をいま冊子にまとめ、作業が事務局を中心に進んでいる。

北海道大学出版会

▼千葉恵著『信の哲学―使徒パウロはどこまで共約可能か―』(上巻・A5判・八六〇頁・一四〇〇〇円、下巻・A5判・五四〇頁・九〇〇〇円)使徒パウロの書簡「ローマ書」に、アリストテレスの言語哲学研究を適用し、意味論的に分析。3章22節の誤訳の指摘により、論争に終止符を打ち和解の基礎を築く。

▼高橋沙奈美著『ソヴィエト・ロシアの聖なる景観―社会主義体制下の宗教文化財、ツーリズム、ナショナリズム―』(A5判・四六〇頁・七五〇〇円)ロシア正教に対する社会心性・宗教性を教会・修道院建築、イコン、フレスコ画他の美術作品の処遇から叙述する意欲作。

▼佐々木貴文著『近代日本の水産教育―「国境」に立つ漁業者の養成―』(A5判・三八六頁・八〇〇〇円)官立及び府県水産講習所について、水産政策、国際情勢や技術等を踏まえ、体系的に描き出す。

▼櫻田譲著『税務行動分析』(A5判・四一四頁・五三〇〇円)ストックオプション訴訟や役員給与支給に関する税法規定改廃などの税務関連事象が納税者行動に与えた影響を会計データから推計する。

弘前大学出版会

▼泉谷眞実・野中章久・金井源太・小野洋共著『リサイクル・バイオ燃料が切り拓く新たなビジョン―使用済み食用油のエネルギー利用―』(A5判・九〇頁・一五〇〇円)リサイクル・バイオ燃料事業の最前線を分かりやすく詳述。使用済み食用油を燃料に変える最新技術の解説、北東北での取り組み事例の調査、環境先進国ドイツでの先行例と現状の分析により、リサイクル・バイオ燃料がもつ大きな可能性を提案する。

▼高瀬雅弘編著『人と建物がつむぐ街の記憶―山形県鶴岡市を訪ねて(1)―』(A5判・二〇四頁・三二〇〇円)城下町の情趣をたたえる鶴岡市には、武士の時代の記憶を伝えるものや、近代化の過程を映し出すものなど、数多くの歴史的建築が残っている。同じみちのくの城下町・弘前市の大学生が訪ね、積み重ねられた想いとそこに息づく物語を集めた。形あるモノとしての建物と、そこでつむがれてきた人びとの記憶。往時を偲ばせるふんだんな写真・資料とともに、鶴岡という街のあゆみと魅力を辿る。

東北大学出版会

▼渡辺健哉著『元大都形成史の研究―首都北京の原型―』(A5判・三三三頁・三八〇〇円)現在の北京と直接に連続する元朝の国都「大都」。クビライが建設したこの都城の形成史を動態的に検証し、実像に迫る。中国史にとどまらず、都市論、都市形成論までを視野に入れた「中華世界の国都」の基層を掘り起こす試み。

▼篠澤和久著『アリストテレスの時間論』(A5判・三四八頁・四〇〇〇円)「時間」とは何か。論理・自然・倫理・物語に見出される時間の諸相を、ランス・モダリティ・アスペクトの視点から考察。存在論的な時間地平と人間学的な時間地平が交差する、アリストテレス時間論への序説。「著作集」などの詳細なテクスト読解と手堅い解釈から得られる、「人間」の存在(ある)。「生き方」の焦点。

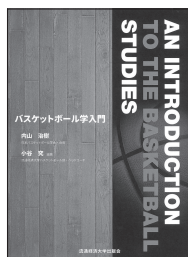
▼東北大学大学院文学研究科講演・出版企画委員会編『わたしの日本学び』(四六判・一九〇頁・二二〇〇円)好評の人文社会科学講演シリーズの九作目。日本および日本文化について、美学・歴史・文学・心理学等の分野からアプローチし、その特徴を再発見する。

流通経済大学出版会

▼中谷秀樹編著／清水久仁子共著『観光と情報システム』（A5判・二六四頁・一八〇〇円）本書は二十一世紀のグローバルな社会において観光のプロフェッショナルを目指す学生、ビジネスマンが情報戦争を生き抜くために不可欠な書である。



▼内山治樹・小谷究編著『バスケットボール学入門』（A5判・二四八頁・一五〇〇円）本書はバスケットボールの分析・究明を通して専門性をより一層高めたいと願う人のために、導かないし道標の役割を担う入門書である。



聖徳大学出版会

▼塩美佐枝・藪中征代・古川寿子・古川由紀子・川並珠緒・東川則子著『言葉の発達を支える保育』（B5判・一三四頁・一六〇〇円）幼稚園教育要領の改訂で、「指導計画の作成上の留意事項」に「言語活動の充実」が特記され、言語環境、言語活動の充実の必要性が盛り込まれました。

本書では言葉を獲得していく過程での人間関係、体験との関わり、思考活動と言葉に注目し、さらに具体的な指導について、多くの事例を用いた解説を多く盛り込みました。現場にも即した実践的な一冊になっています。

〈目次〉第一章 言葉の機能／第二章 言葉の発達／第三章 体験と言葉／第四章 人間関係の発達と言葉／第五章 保育内容「言葉」／第六章 具体的な指導



慶應義塾大学出版会

▼アプター著／秋草俊一郎・今井良一・坪野圭介・山辺弦弘訳『翻訳地帯―新しい人文学の批評パラダイムにむけて―』（A5判・四二〇頁・五五〇〇円）「戦争とは誤訳や食い違いの極端な継続にほかならない」という定義から出発し、「ポスト九・一一」の世界状況を人文学のこ

とばで縦横無尽に語り、分析する。翻訳研究と文学を融合させる斬新な試み。

▼高柳克弘『どれがほんと？―万太郎俳句の虚と実―』（四六判・一七六頁・一六〇〇円）「時計屋の時計春の夜どれがほんと」普遍的な詩情を卓越した言葉の芸で生み出し続けた万太郎。誰も言葉で掬い取ることが叶わなかった近現代の俳句にないその特質と魅力を、俳句の本質に迫りつつ論じた若手俳人の画期的論考。

▼ピーター・ポランツェフ著／池田年穂訳『ブーチンのユートピア―21世紀ロシアのメディア支配―』（四六判・三二四頁・二八〇〇円）カネと権力に塗れたシユールな世界で、新たな独裁体制を築くブーチン。退廃から狂気へと向かうメディア中枢部から、ブーチン・ロシアの実態を描く話題作。ロシア版『一九八四年』。

専修大学出版局

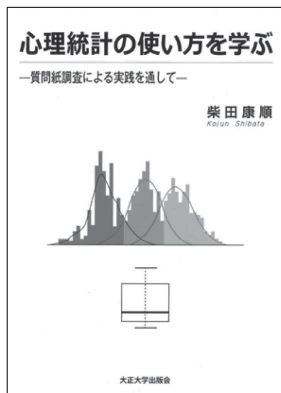
▼小森田龍生著『過労自死の社会学―その原因条件と発生メカニズム―』（A5判・二二四頁・二六〇〇円）過労自死の特徴とはどのようなものか。なぜ人は仕事との関わりの中で命を絶つに至るのか。判例をデータ化した比較分析と個々の事例分析により過労自死の実態を考察する。

▼新島裕基著『地域商業と外部主体の連携による商業まちづくりに関する研究―コミュニティ・ガバナンスの観点から―』（A5判・二四〇頁・二六〇〇円）地域商業再生には、コミュニティの担い手や、地域がかかえる社会課題の解決が望まれる。本書では「コミュニティ・ガバナンス」の概念に着目して、多様な外部主体と連携する各地のケースを探る。

▼土屋昌明編『映像の可能性を探る―ドキュメンタリーからフィクションまで―』（A5判・二六〇頁・三二〇〇円）二〇世紀後半、映像による視覚文化が発展するプロセスで、映像（特にドキュメンタリー映画）がどのような作用を及ぼすものとして扱われてきたかを考える。

大正大学出版会

▼柴田康順著『心理統計の使い方を学ぶ―質問紙による実践を通して―』（B5判・一四六頁・一七〇〇円）心理学において統計が苦手な人に向けた実践的な入門書であり、公認心理師カリキュラム「心理統計法」対応のテキスト。質問紙調査の計画から実施、データ分析、レポート作成といった「調査研究のキモ」の部分をカバー。



▼大正大学地域構想研究所編『地域人』（A4判・平均一四四頁・一〇〇〇円・毎月十日発売）第三〇号 特集「こんな図書館のあるまちに住みたい」Part1 住民とつくりあげる図書館／Part2 複合化する図書館／Part3 まちライブラリー他

玉川大学出版部

▼中島英博編著『シリーズ大学の教授法4 学習評価』（A5判・二〇八頁・二四〇〇円）学習評価とは学生の学習成果を最大限に高める、より広範な教育活動のこと。学生の学習活動を把握し、設定した学習目標に到達したかを、可視化する方法を示す。ルーブリック評価、ポートフォリオ評価など、多様な評価を網羅。

▼近田政博編著『シリーズ大学の教授法5 研究指導』（A5判・二〇〇頁・二四〇〇円）大学院に限定されがちだった研究指導を、学士課程での指導、助言、支援まで拡大させ、その意義や難しさを明らかにする。研究指導でめざすべき目標を説明し、学生と信頼関係を築く方法や、集団指導の具体的ノウハウなどを提示。

▼萩裕美子編『黒須高嶺絵〈玉川百科こども博物誌〉頭と体のスポーツ』（A4判・一六〇頁・四八〇〇円）スポーツはすべての人に楽しみや元気を与えてくれる。野球やサッカーだけでなく、囲碁や将棋など、おもに頭を使うスポーツのルールや楽しみ方もイラストを交えて紹介。オリンピックのはじまりや最新のスポーツの科学の世界も探る。

中央大学出版部

▼妹尾達彦著『グローバル・ヒストリー』（B5判・二八〇頁・三〇〇〇円）
従来とは異なる見方で人類の歴史を読み解き、人類共生の道を求める二一世紀の世界史教科書。内陸部から沿海部への交通幹線の転換により、人類の政治や軍事、経済、社会の組織、宗教、思想のあり方が大きく変貌していき、現代世界がつくられていくことを、豊富な図を駆使して体系的かつ具体的に論じる。ユーラシア大陸東部の歴史を一つのモデルとして世界史の構造をさぐり、二一世紀の混沌を生きる人々に新しい歴史像を提供する。

▼萩原金美『検証・司法制度改革Ⅰ、Ⅱ「その後―自史的記述を兼ねて―」』（四六判・二七〇頁・二五〇〇円）、生涯にわたり裁判法研究を続けた著者は、法律学、とくに裁判法学を広義の人間学と捉え、司法制度改革のあり方に関する私見を読者に問いかけています。裁判官、研究者としての豊かな経験に基づき、自己の研究生活の回顧と展望も含めた本書は、著者の研究テーマ、問題関心と関連のある多数の書籍・論文等についての紹介も含まれた遺稿集である。

東京大学出版会

▼石川学著『ジョルジュ・バタイユ行動の論理と文学』（A5判・三六八頁・五八〇〇円）第二次世界大戦を経て変化していく思索の跡を著作の丹念な読解を通して辿り、政治、文学、学知が密接に結びつく思想の全体像を明らかにする。

▼第七回東京大学南原繁記念出版賞受賞作
▼羽田正著『グローバル化と世界史』（四六判・三〇二頁・二七〇〇円）「新しい世界史」叙述を提起し、大きく展開する学問状況とその実践についてわかりやすく論点を明示する。シリーズ・グローバルヒストリー第一巻（全九巻）。

▼若林幹夫・立岩真也・佐藤俊樹編『社会が現れるとき』（四六判・四三〇頁・三八〇〇円）社会がごく自然に存在してしまうことへの疑いと驚き。社会の現れはどのように経験され、思考され、人びとの行為や関係と結びついてゆくのか。研究の最前線を示す新しい社会学論集。

▼松原洋子・伊吹友秀編『生命倫理のレポート・論文を書く』（A5判・二〇〇頁・二五〇〇円）私たちの生老病死にかかわる生命倫理の問いについて、論文の執筆を通じて深く考えるためのガイドブック。

東京電機大学出版局

▼中村克彦著『コンピュータとは何か?』（A5判・二五八頁・二四〇〇円）コンピュータの創出に必要な不可欠ないくつかの理論や科学技術を、ことば・情報・論理・思考・知識の5つのキーワードから紐解きます。コンピュータの起源から、人工知能・機械学習などの最新の技術まで、主要技術の相互関係を明らかにしながら解説しています。「コンピュータとはどういうものか」、「コンピュータはどのように生まれたのか」、「何ができて何ができないのか」を扱っています。これらの問題は「機械がどれだけ人間に代われるか」さらには「人間とは何か、生物とは何か」などの問題にまで関係しています。コンピュータに関心を持つ読者に贈る一冊です。



法政大学出版局

- ▼M・デ・ウナムーノ著／執行草舟監訳／安倍三崎訳『ペラスケスのキリスト』（四六判・四一四頁・二七〇〇円）スペイン精神の深層と人間の運命を歌い上げる長篇詩作品の知られざる傑作。本邦初訳。
- ▼西山美久著『ロシアの愛国主義―プーチンが進める国民統合―』（四六判・三三六頁・三六〇〇円）失われた超大国の自信を取り戻すため、プーチンが共産主義にかわって打ち出した新たな理念とは。
- ▼R・カイヨワ著／金井裕訳『アルペイオスの流れ―旅路の果てに―（改訳）』（四六判・二三四頁・三四〇〇円）ギリシアの川神に託して自らの思想の遍歴を語るマルセル・ブルースト賞受賞作品。
- ▼A・マッキンタイア著／高島和哉訳『依存的な理性的動物―ヒトにはなぜ徳が必要か―』（四六判・二八八頁・三三〇〇円）人間を他者への依存の下で初めて開花しうる動物として理解する明察。
- ▼J・クリステヴァ著／栗脇永翔・中村彩訳『ボーヴォワール』（四六判・二八六頁・二七〇〇円）その生涯と作品によって前例のない革命を体現した作家の思想を理論家・分析家クリステヴァが読む。

武蔵野大学出版会

- ▼土井隆司著『気づきが導く！成功！キャリアデザイン』（A5判・二二六頁・一六〇〇円）自分のこれまでの人生に気づき、自分のこれからの可能性に気づくためのキャリアデザインブック。英文対応なので留学生にもオススメ！



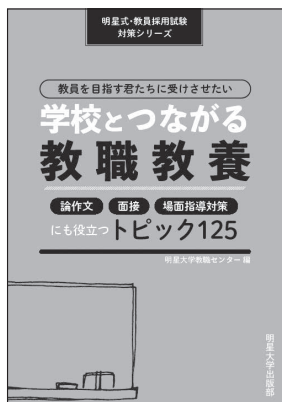
- ▼佐藤佳弘著『脱！スマホのトラブル（増補版）』（四六判・二〇八頁・一三五〇円）二〇一四年に出版して好評だった『脱！スマホのトラブル』の増補版。
- ▼佐藤佳弘著『脱！SNSのトラブル』（四六判・一六〇頁・一三五〇円）SNSのトラブルを紹介し、上手に使うためのノウハウを豊富なイラストで解説！
- ▼三田誠広著『ここらにとどく欺異抄』（A5判・二四八頁・一八〇〇円）小説家であり、武蔵野大学の教授である著者が、可能な限りわかりやすい言葉で解説した「超口語訳版の欺異抄」。日本の仏教がよくわかる「仏教の歴史」付き。

武蔵野美術大学出版局

- ▼上原幸子編『デザインとコミュニケーション』（B5判変型・二七二頁・三七八〇円）個人がデザインの思考で身近な問題に関わったとき何が生まれるのか。「私」「私たち」からコミュニケーションへ、社会へと繋がるネットワークと、その可能性について論じる。一九八〇年代から続く先駆的な取り組みをはじめ、砧・多摩川あそび村、世田谷区立桜丘すみれば自然庭園、東京にしがわ大学など、継続し、さらに未来へと続く数多くのプロジェクトを豊富な図版とともに紹介する。
- ▼新見隆・伊東正伸・加藤義夫・金子伸二・山出淳也著『アートマネージメントを学ぶ』（A5判・四三二頁・二八〇八円）あらゆる面で変革が求められる今の時代にこそ、アートが担うべき役割がある。多様なアートの力を引き出しながら社会へ有効に働きかけ、人々の意識や行動に変化をもたらすことで世界が変わる。そんな真のアートマネージメントについて探究する。さまざまな事例、アートマネージメントの理論的背景なども紹介。独創的かつ魅力的なアートマネージメントの実践へ、その第一歩となる一冊。

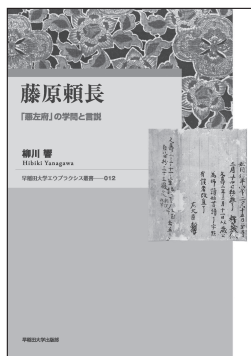
明星大学出版部

▼明星大学教職センター編（明星式・教員採用試験対策シリーズ）『教員を目指す君たちに受けさせたい 学校とつながる教職教養―論文・面接・場面指導対策にも役立つトピック125―』（A5判・三〇〇頁・一八五〇円）学校とつなげ、学校で生かせる教職教養。自然と教職教養が身に付く受験生必携の書。ベーシッククエスチョンとアンサーによって論文文、面接、場面指導等の解答の方向性が見える。教育現場での疑問解決に役立ち、学校の教育の構造が理解できる。教育実践へのアプローチの仕方が理解でき、若手教員にも学校での教育実践の基礎が分かるきっかけとなる書。長らく現場を指導してきた教員の教師力を学ぶ。



早稲田大学出版部

▼柳川響著『早稲田大学エウブラクシス叢書』『藤原頼長』（A5判・三〇二頁・四〇〇〇円）保元の乱に敗れ、三七歳の若さでこの世を去った藤原頼長。妥協を知らない苛烈な性格から「悪左府」と呼ばれる一方、「日本一の大学生（だいがくしょう）」と評されるほど、ひととき優れた学識の持ち主でもあった。議論が尽くされたとはいいたい頼長の文人としての顔を遺された資料から明らかにし、その実像を捉え直した意欲作。



▼森達也著『早稲田大学エウブラクシス叢書』『思想の政治学』（A5判・三二二頁・四〇〇〇円）二〇世紀ユダヤ系知識人、政治思想家であるバーリンの哲学、政治理論、思想史、シオニズム論を統合的に理解し、特質を明らかにする。

関東学院大学出版会

▼深谷安子・北村隆憲編著『看護におけるコミュニケーション・パラダイムの転換』（A5判・一七六頁・二〇〇〇円）高齢者の多くは、人生最後の日々を施設ですごしているが、一日の発語時間は平均四分にすぎない。本書では、病院や施設における医療者と高齢者のコミュニケーションの実態調査やその背景の探索を通して、コミュニケーションをケアとして考えることの重要性を述べている。

〈目次〉第1章 看護におけるコミュニケーション・パラダイムの転換／第2章 看護コミュニケーション研究の動向／第3章 要介護高齢者とケア提供者とのコミュニケーション／第4章 看護コミュニケーションを相互行為として分析する／タイプIとタイプIIの質的分析／第5章 看護における非言語コミュニケーションおよびその計測／第6章 COPD患者のセルフマネジメント教育におけるコミュニケーション／第7章 認知症ケアにおけるコミュニケーション



東海大学出版部

▼浅野清彦・小松敏弘・今田恒久・的場英行・木佐森健司・渡邊道治・鈴木康夫・阿部正喜・高野誠二著『基本経営学』（A5判・二七八頁・二八〇〇円）経営学の初学者に向け、観光業の経営を行う上で必要な、マーケティング・CSR・統計・自然（生態系）・組織論・地域調査・マネジメント・資源管理・都市観光の各分野を解説する。



▼松本忠夫訳『歩行するクジラ』（A5判・三〇四頁・四〇〇〇円）太古の昔、クジラの祖先はなぜ陸上を捨て水中生活を選んだのかを、世界各地でのフィールドワークを通して古生物学と分子生物学の世界から紐解く。

▼図研究会著『図4 建築のスケール』（B5変型判・一〇四頁・二〇〇〇円）QRコードを読み込み、Googleマップで現地にアクセスすることで、世界中に存在する様々な建物の全体プランを同一尺度のもとと羅列した建物スケール比較図集。

名古屋大学出版会

▼宮紀子著『モンゴル時代の「知」の東西』上・下（菊判・五七四頁／六〇〇頁・各九〇〇〇円）日本からヨーロッパまで、人・モノ・情報が行き交う……。世界史上、空前のレベルで展開したユーラシアを貫く「知」の交流。百科事典などから宗教・政治・経済の諸制度まで、モンゴル帝国によるダイナミックな革新と統合の実像を、多言語史料により描き出す。

▼阿部泰郎著『中世日本の世界像』（A5判・六〇四頁・六八〇〇円）芸能から魔界まで……。絵巻や曼荼羅、物語や儀礼のなかで生動する男女・仏神・異類たちそれらの存在を支えた世界像とはいかなるものだったのか。時代とともに揺れ動く文化の諸相を一望し、中世の世界を多面的にとらえた渾身の書。

▼I・ジャブロンカ著／真野倫平訳『歴史は現代文学であるー社会科学のためのマニフェスト』（A5判・三二〇頁・四五〇〇円）文学的ゆえに科学的？ 真実と物語の間で揺れ動き、その意義を問われてきた歴史。ポストモダンイズムの懷疑を乗り越えた後で、いかにして「歴史の論理」を立て直すことができるのか。

名古屋外国語大学出版会

▼佐藤一嘉・矢後智子編著『英語が好き な子供を育てる魔法のタスク 小学校英語のために』（B5判・一二〇頁・二五〇〇円）外国語大学ならではの画期的なメソッドを生かしたタスク集。小学校英語の導入にさきがけ、教員だけでなくさまざまな英語インストラクターにも！

本書の特徴……新学習指導要領に対応していること。最新の外国語教授法（タスク・ベース・ティーチング）に基づき、読む・聞く・話す・書くの4技能の指導法を学び、授業案を作成、評価の仕方、および評価基準について学ぶことができる。Song task・Listening task・Speaking task・Reading task・Writing task・Story telling task・Making a lesson planus……など。



▼近刊予定 城月雅大ほか『まちづくりの論理学』（仮題、佐原秋生・大岩昌子『食と文化の世界地図』（七月刊）。

三重大学出版会

▼『芭蕉庵の終括』（四六判・三二八頁・二八〇〇円）。

口絵

序章 時流

第一章 深川寒夜

第二章 ある来訪者

第三章 組み替えられる旅行記録

第四章 最後の断片

第五章 幻覚素質者

第六章 熊の胆

第七章 冬の病魔

第八章 鳥は雲に帰る

『爰の小文』本文（乙州本）

第九章 まとめ―魔界を逃れて

補注／跋文／参考文献目録／索引

▼『自分ごととして考えるこれからのエ

ネルギー教育』（B5判、六八頁・一六

〇〇円）。

I部 授業を行うにあたって 4頁

II部 教材『あなたならどうする？高

レベル放射性廃棄物の処分』（教

師用ワークシート 64頁、付録C D

付き）

京都大学学術出版会

▼『防災読本』出版委員会／中井仁監修
『教育現場の防災読本』（菊判、六一〇頁・三八〇〇円）多様な災害に対応した普遍

性と、継続性をもった防災教育を実現す

るために。災害のメカニズムから法律・

医療まで、全般にわたって知ること、

子どもを守り、災害を乗り越えるための

知識を体系的に身につける必携書。

▼政池明著『荒勝文策と原子核物理学の

黎明』（菊判、四六二頁・四八〇〇円）

敗戦直後、日本の科学技術を調査した占

領軍を驚かせた日本の原子核研究の高い

水準。「秘話」として部分的にしか語ら

れてこなかった、激動の近代史の中で取

り組まれた核研究を、初めて内外の膨大

な資料の解析で通史として記録する。

▼田中和子編、佐藤兼永撮影『探検家ヘ

ディンと京都大学―残された60枚の模写

が語るもの―』（A4判変型・二七八頁・

六八〇〇円）一九〇八年、スウェン・ヘ

ディン来日の際に京都大学に残された模

写全点を完全掲載。未知の地を踏査し

数々の発見を成し遂げた「世界の大探検

家」の到来は、学術探検の黎明期にあっ

た日本にどのような影響を与えたか。

大阪経済法科大学出版部

▼豊下檐彦・澤野義一・魏栢良編著『北

東アジアの平和構築―緊張緩和と信頼構

築のロードマップ』（A5判・三〇〇

頁・二五〇〇円）第I部 北東アジア情

勢と平和構築の課題 第1章 北東アジ

アの構造変容と日本外交（豊下檐彦）／

第2章 北東アジアの平和構築（魏栢良）／

第3章 北東アジアの平和と安全保障にお

ける自衛権論の検討 第6章 集団的自

衛権と永世中立（澤野義一）／第7章

核兵器使用と自衛権（糟谷英之）／第III

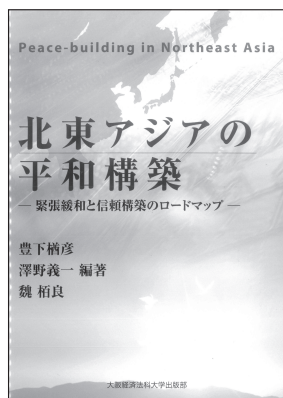
部 市民による平和と人権の推進／第8

章 信頼醸成のためのアクターとしての

市民社会のネットワーク（梅田章二）／

第9章 ソフトパワーとしての平和実践

トレーニング（奥本京子）他2章



大阪大学出版会

- ▼八十島安伸・中道正之編著『シリーズ人間科学1 食べる』（四六判・二三八頁・一八〇〇円）「食べる」をキーワードに、心理学、社会学、教育学、哲学などの学問領域から、「人そのものと、人が営む社会」を明らかにする。大阪大学大学院人間科学研究科発の新シリーズ創刊。
- ▼河合祐司・浅田稔編著『大阪大学総合学術博物館叢書14 ロボットからヒトを識る』（A4判・九六頁・二〇〇〇円）阪大ロボット研究の特徴ともいえるヒューマノイドやアンドロイドなどのロボットたちと、そのココロの創生に夢をもつ研究者の足跡を多数のカラー図版で紹介。
- ▼中村平著『植民暴力の記憶と日本人―台湾高地先住民と脱植民の運動―』（A5判・二四六頁・五〇〇〇円）日本人は旧植民地の人々がもつ暴力の記憶に対してどのように向き合うべきか。台湾高地先住民への聞き書きから脱植民地化に向けた営みを明らかにするとともに、日本植民主義の克服を記述のなかで遂行する。

関西学院大学出版会

- ▼ロバート・タリース著／白川俊介訳『政治哲学の魅力』（A5判・二八八頁・二九〇〇円）
- ▼山本隆・武田丈編著『社会起業を学ぶ―社会を変革すること―』（A5判・一六六頁・一五〇〇円）
- ▼安岡匡也著『少子高齢社会における社会政策のあり方を考える』（A5判・二三八頁・二六〇〇円）
- ▼岡田弥生著『眼』から「薔薇」へ―F・H・ブラッドリー哲学から読み解くT・S・エリオットの自意識の変容―（A5判・四〇八頁・四八〇〇円）
- ▼小西尚実編著『グローバルキャリアのすすめ―プロフェッショナル講義―』（A5判・二〇八頁・一五〇〇円）
- ▼井福剛著『古代ローマ帝国期における北アフリカ・カルタゴ周辺地域における文化と記憶―』（A5判・一七二頁・三六〇〇円）
- ▼芝野松次郎編著『ソーシャルワーク研究におけるデザイン・アンド・ディベロップメントの軌跡』（A5判・二八六頁・四〇〇〇円）

関西大学出版部

- ▼木庭元晴著『飛鳥藤原京の山河意匠―地形幾何学の視点―』（B5判・二四八頁・三六〇〇円）飛鳥時代の仏塔や天文台そして藤原宮は、推古期に設置された天の北極（真北）軸や大和三山の太極（垂心）に精緻に配置されていた。隣接する飛鳥川と高取川の付け替えは斉明期に施工された。記紀やこれまでの研究では全く触れられてこなかった歴史的事実を精緻な地形情報と考古遺跡の分布からはじめて明らかにした。



- ▼中谷伸生著『日本の近世近代絵画と文化交渉』（B5判・二九八頁・四九〇〇円）江戸時代から現代に至る日本近世近代絵画史研究。江戸時代の大坂画壇の絵画を含む狩野派、四条派、文人画から近代および現代絵画までの交流を扱う論考。日本の絵画を中心とする中国、台湾、フランス、スペインなどの絵画との比較研究。新資料を数多く掲載した研究書で、美術史的な文化交渉学の可能性を問う。

広島大学出版会

▼衛藤吉則著『西晋一郎の思想―広島から「平和・和解」を問う―』（A5判・二〇七頁・二九〇〇円）西の思想を、戦前における東西の思想的蓄積と発展のうちに位置づけ直し、「平和・和解」理論としての可能性を問う。

▼伊藤敏安著『2000年代の市町村財政―「平成の大合併」と「三位一体の改革」の影響の検証―』（A5判・一九七頁・二五〇〇円）合併市町村と非合併市町村を比較し、市町村財政の現状を丹念に検証する。

▼於保幸正、海堀正博、平山恭之著『地表の変化―風化・侵食・地形・土砂災害―』（B5判・一一〇頁・二一〇〇円）中国地方の地形や近年の土砂災害の特徴を俯瞰し、岩石の風化や侵食など地表の身近な自然現象について、写真を使って分かりやすく説明する。

▼吉中孝志著『名前で読み解く英文学―シェイクスピアとその前後の詩人たち―』（四六判・一五九頁・八五〇円）英文学の登場人物名に隠された、著者自身や愛するひとの痕跡を分析し、詩人たちの生きた時代や彼らの心を読み解く。

九州大学出版会

▼鹿児島近代初期英国演劇研究会訳『王政復古期シェイクスピア改作戯曲選集』（四六判・五七四頁・六〇〇〇円）悪名高いテイトのハッピーエンド版「リア王」等、改作劇四作品の本邦初訳と解説。

▼西田紘子『ハインリヒ・シェンカーの音楽思想―楽曲分析を超えて―』（A5判・二三四頁・四六〇〇円）音楽作品の解釈とは何か？世界的な楽曲分析法の創始者が挑んだ難問に迫る本格的research書
▼種村完司『『葉隠』の研究―思想の分析、評価と批判―』（A5判・三四六頁・二八〇〇円）『葉隠』思想の光と影を解明し、様々な論者の葉隠論をふまえ、今日どのような再評価や批判が必要を示す。

▼上利政彦『創造の技術―ルネサンス模倣論とミルトン―』（A5判・二七二頁・四五〇〇円）古典模倣論をキケロに遡りドライデンに至る継承を辿る。ミルトンの新叙事詩、新科学との関係も論じる。
▼川上具美『思考する歴史教育への挑戦―暗記型か、思考型か、揺れるアメリカ―』（A5判・三四〇頁・三六〇〇円）白人優越主義の中にある歴史教育の課題と改革。

編集後記

▼本号の特集のもとになったのは、昨年十一月十七日に東京・下北沢の「ダーウィンルーム」で開催された大学出版部協会編集部会の研修会である。協会には編集部会と営業部会が置かれ、全国二十九大学出版部の担当者が属している。編集部会では毎秋、編集者の技術・力量の向上、広い視野の獲得、情報の共有を目的に、研修会を開催している。▼「文系×理系、研究者×編集者の立場から」と副題を付けられたその研修会では、中島隆博先生と木下正高先生をお迎えし、前田晃一さんと小松美加さんが司会・進行を務め、賛助会員の方々を含む三十六名が参加した。論文と本の違い、査読の有無、研究者が生み出すものの発表のしかたなどが議論された。▼長谷川一さんの「出版と知のメディア論」（みずす書房）や橘宗吾さんの「学術書の編集者」（慶應義塾大学出版会）でも指摘されているように、本というメディアは「作品」としてでしか捉えられないのかもしれない。本特集が形態としての「本」の存在意義、「本」という表現を選択する意味を見つめ直すきっかけになれば幸いである。（M）

大同印刷(株)	〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20 TEL 0952-71-8550
ダイニツク(株)	〒105-0004 東京都港区新橋6-17-19 御成門ビル TEL 03-5402-1811
(株) 太平印刷社	〒140-0002 東京都品川区東品川1-6-16 TEL 03-3474-2821
(株) 太 洋 社	〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1 TEL 058-324-2111
(株) 竹 尾	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6 TEL 03-3292-3617
(株) 東京弘報社	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34 TEL 03-3291-1771
(株)とうこう・あい	〒104-0061 東京都中央区銀座7-13-12 サクセス銀座7ビル4F TEL 03-5148-7200
東光整版印刷(株)	〒135-0006 東京都江東区常盤2-12-15 TEL 03-3632-0801
東洋美術印刷株式会社	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-6-2 TEL 03-3265-9861
(株) トーヨー企画	〒602-0923 京都府京都市上京区油小路通中立売上ル 油橋詰町93-7 TEL 075-411-8288
図書印刷(株)	〒114-0001 東京都北区東十条3-10-36 TEL 03-5843-9700
(株) 日新広告社	〒101-0061 東京都千代田区三崎町2-12-10 喜久屋ビル3F TEL 03-3263-9431
(株) 日本経済新聞社	〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7 TEL 03-5255-2198
日本宣伝販売(株)	〒330-0856 埼玉県さいたま市大宮区三橋3-278 TEL 048-620-1021
萩原印刷(株)	〒112-0004 東京都文京区後楽2-21-12 TEL 03-3811-4272
(株) 博 報 堂	〒107-6322 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー19F TEL 03-6441-6711
藤原印刷(株)	〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-4-5 TEL 03-3291-0191
(株) 平 文 社	〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7 TEL 03-3944-0301
(株) 堀内印刷所	〒335-0034 埼玉県戸田市笹目3-11-5 TEL 048-422-0029
(株) 毎日新聞社	〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 TEL 03-3212-3340
誠 製 本 (株)	〒174-0042 東京都板橋区東坂下1-19-5 TEL 03-3967-3952
(株) 遊 文 舎	〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31 TEL 06-6304-9325
(株) 読売新聞東京本社	〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1 TEL 03-3242-1111
(株) ライトコミュニケーション	〒101-0035 東京都千代田区神田紺屋町11 岩田ビル5F TEL 03-3251-7571

一般社団法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援くださる皆様による「賛助会員」制度を設けています。ここに趣旨にご賛同くださり、ご支援いただいている各社様をご紹介します。なお、「賛助会員」に関するお問い合わせは、協会事務局までお寄せください。

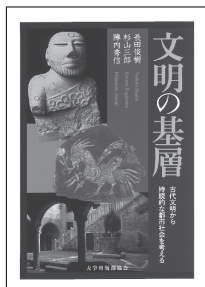
一般社団法人 大学出版部協会 賛助会員名簿

(株) 朝 日 新 聞 社	〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2 TEL 03-5540-7749
亜 細 亜 印 刷 (株)	〒380-0804 長野県長野市大字三輪荒屋1154 TEL 026-243-4858
(株) ア ベ ル 社	〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408 TEL 03-3235-1360
尼 崎 印 刷 (株)	〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20 TEL 06-6494-1122
(株) A L E	〒103-0023 東京都中央区日本橋本町2-8-6 日本橋ビル4階 TEL 03-5652-8627
王 子 製 紙 (株)	〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5 TEL 03-3563-7072
カクタス・コミュニケーションズ(株)	〒101-0061 東京都千代田区三崎町2-4-1 TUG-Iビル4F TEL 03-6261-2290
(株)加藤文明社印刷所	〒101-0061 東京都千代田区三崎町2-15-6 K-STAGE TEL 03-3261-8281
城 島 印 刷 (株)	〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6 TEL 092-531-7102
(株)紀伊國屋書店	〒153-8504 東京都目黒区下目黒3-7-10 TEL 03-6910-0510
(株) ク イ ッ ク ス	〒456-0004 愛知県名古屋市中熱田区桜田町19-20 TEL 052-871-9190
(株) 糸 川 印 刷	〒112-0012 東京都文京区大塚6-9-7 TEL 03-3943-9811
(株)クリムゾンインタラクティブジャパン	〒101-0021 東京都千代田区外神田2-14-10 第2電波ビル4F TEL 03-3525-8001
港 北 出 版 印 刷 (株)	〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7 TEL 03-5466-2201
三 松 堂 (株)	〒101-0065 東京都千代田区西神田3-2-1 住友不動産千代田ファーストビル南館14階 TEL 03-6823-5360
三 美 印 刷 (株)	〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8 TEL 03-3803-3131
三 立 工 芸 (株)	〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F TEL 03-3261-5171
三 和 印 刷 (株)	〒381-2226 長野県長野市川中島町今井1822-1 TEL 026-285-2300
信 濃 印 刷 (株)	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11 TEL 03-3237-3601
(株) 渋谷文泉閣	〒380-0804 長野県長野市三輪荒屋1196-7 TEL 026-244-7185
(株) 眞 興 社	〒150-0033 東京都渋谷区猿楽町19-2 TEL 03-3462-1181
新 日 本 印 刷 (株)	〒162-0801 東京都新宿区山吹町342 TEL 03-3269-3611
(株) 精 興 社	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-9 TEL 03-3293-3021
創 栄 図 書 印 刷 (株)	〒604-0812 京都府京都市中京区高倉通二条上ル天守町766 TEL 075-255-2288

大学出版部協会・ブックレット

大学出版部協会 発行／東京大学出版会 発売【2015年7月刊】

2014年5月に千代田区立立比谷図書文化館で開催された市民シンポジウム「文明の基層」(総合地球環境学研究所・京都大学学術出版会・大学出版部協会 主催／活字文化推進会議 後援)の内容をブックレット化しました。



長田俊樹
杉山三郎
陣内秀信

おさだとしき(総合地球環境学研究所名誉教授、神戸市外国語大学客員教授)
すぎやまさぶろう(愛知県立大学大学院特任教授、アリゾナ州立大学人類学部教授)
じんないひでのぶ(法政大学デザイン工学部教授)

文明の基層

古代文明から持続的な都市社会を考える

A5判・80頁／定価(本体1,200円＋税) ISBN978-4-13-003152-3

古代都市のイメージは大きく変わりつつある。インダス文明の諸都市のゆるやかなネットワーク、中米の古代最大都市テオティワカンでの新しい発見。人はなぜ都市を作ってきたのか、その歴史的基層を中世ヨーロッパのヴェネツィアと比較しながら、改めて都市の魅力と未来への可能性を探る。大学出版部協会ブックレット第3弾。

〈主要目次〉

第一章 インダス文明：ネットワーク都市——中央集権的文明観を覆す(長田俊樹)

「大河文明」は本当か?—広大なインダス文明／インダス文字とインダス印章／草原の遺跡、海岸沿いの遺跡—大河から離れて／砂漠の遺跡の謎／「城塞」と「パスポート」—都市ネットワーク論に向けて／墓から見えるもの—格差の不在／砂丘が先か、文明が先か／インダス文明は大河文明ではなかった—農業と水害の視点／古代文明観を見直す—「穀物倉」と「アーリア人侵入説」／文明の衰退について考える／ゆるやかなネットワークの存在／都市社会をどう見るか—中央集権的文明観からの解放

第二章 新世界最大の古代都市テオティワカン：英知の集積としての都市(杉山三郎)

閉ざされた空間の多様性／文明の萌芽／認知能力＝知恵こそが、文明の基盤をなす／中規模都市がで始める／完全計画都市、テオティワカン／多くの人を迎える巡礼地として／暦と数の体系／「太陽のピラミッド」と「月のピラミッド」の二元性／墓は語る／古代人の交流—物を集めるネットワーク／文明の確立から崩壊へ—伝わり、つながる文明の諸要素

第三章 水都ヴェネツィア：交易都市から文化都市へ(陣内秀信)

水と共生する町、ヴェネツィア／逆・中央集権的構造都市—複雑に交差する水と陸のネットワーク／都市を解読する／交易都市から文化都市へ／オリент志向と柔軟性／分散的都市から統合的都市へ／なぜ都市に人が集まるか／城壁の無い町／都市モデル再考／川が結ぶネットワーク／水車の活用／考古学調査がヴェネツィアのイメージを変える／ヴェネツィアの食と産物のネットワーク／ラグーナは自然・環境・歴史の宝庫—文化都市から環境都市へ

立教大学出版会

http://www.rikkyo.ac.jp/u-press/

**被害者の危険の
引受けと個人の自律**

三代川邦夫 著
A5判上製 二〇〇頁 二七〇〇円

近代法が急遽に置く「個人」像の意味と限界について、実際の事件と判例を交えながら探究する。

コモンウェルスの政治思想史
エリザベス一世期の政治的イングリランド意識
山根明大 著 近代国家の思想的基盤ともいえる「政治的イングリランド意識」の中核、「コモンウェルス」概念の形成過程を追う。
A5判上製 三三八頁 四六〇〇円

キープへの道 昭和史を拓いた
ポール・ラッシュ
エリザベス・アン・ヘンフィル 著 松平信久・北條鎮雄 訳
日本聖公会の再建、キープ協会創設などの足跡を残すポール・ラッシュの歩みを「エピソードと共に描く」。
A5判上製 三三六頁 三八〇〇円

(表示価格は税別です)

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

発売＊丸善雄松堂株式会社

TEL03(6367)6131 FAX03(6367)6201

筑波大学出版会

新刊4冊のご案内

ひとと自然をつなぐ
自然保護学入門

A5判 29000円＋税 【紙版・電子版・POD版 全版カラー】

テクノピアサポートの時代を生きる君たちへ
サイバニクスが拓く未来

A5判 15000円＋税 山海 嘉之 著

変貌する

堤 純 編著

現代オーストラリアの都市社会

「科学の芽」賞実行委員会 編

「科学の芽」の世界 PART 6

B5判 22000円＋税 【紙版・電子版・POD版 全版カラー】

発売：丸善出版株式会社

POD版発売：Amazon

東京学芸大学出版会

アクティブ・ラーニング 時代の古典教育

—小・中・高・大の授業づくり—

河添房江 編

A5判 248頁 2500円＋税

中学校・高等学校数学科

授業力を育む教育実習

西村圭一・太田伸也 編著

B5判 208頁 2000円＋税

いじめの乗り越え方・防ぎ方

—望ましい支援・指導の方法—

江川玖成 編著

四六判 272頁 1800円＋税

戦後日本の国語教育

—二松學舎に学んだ沖山光の軌跡—

沖山光研究会 編

A5判 496頁 4500円＋税

GIP

[TEL] 042-329-7797 [FAX] 042-329-7798
[HP] http://www.u-gakugei.ac.jp/~upress

インド ジェンダー 研究ハンドブック

栗屋利江 井上貴子【編】

激動するインド社会を理解するのにジェンダーの視角は必須である。カースト、宗教、階層、エスニシティ、言語、都市と農村、歴史的变化。さまざまな位相とジェンダーの規範とが複雑に絡み合い、多面的なインド社会を形成している。インドの女性をめぐる流通されてきた画一的なイメージから思考を解き放ち、ジェンダー研究の新たな地平を切り拓く画期的な入門書。

2200円＋税

深淵の沈黙

ファム・コン・ティエン【著】野平宗弘【訳】

ベトナム戦争下の1967年、若き詩人が放った思想闘争の書。ハイデッガー思想との対話を通じ、ベトナム戦争の窮極的原因を西洋形而上学と見定めた著者が、東洋の叡智をもって、西洋近代が忘却してきた〈存在〉の覚醒を訴え、一切の思弁を破壊して、東西を越えた人類共通の故郷たる〈深淵の沈黙〉への路を提示する。時代の閉塞に挑んだ、孤高の思想を初見。 3200円＋税

東京外国語大学出版会
Tokyo University of Foreign Studies Press

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1 TEL: 042-330-5559
URL: www.tufs.ac.jp/blog/tufspub/

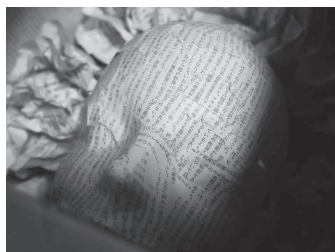


Photo: © Yuno TERAGIWA

表紙写真:「つつむー本葬ー」(部分)
作:寺際悠乃

図書館から除却、廃棄された本を素材として
使用し制作された立体アート作品。
棺とそこに横たわる人のかたちを
捨てられた書物の頁で包んでいる。
「つつむ」という語には「中のものを大切に守る」
「包む人の心を表現する」などの意味がある。
物語や知識を包む「本」と、人が生きた証や
思いを包む「棺」のイメージが、言葉を通じて
静かに重ね合わされている。

※季刊「大学出版」は、大学出版部協会の
公式HPでも、PDF版を全文無料で
ダウンロードいただけます

大学出版 115号 (2018年夏)
2018年7月1日発行
頒価 100円(〒共)

発行所: 一般社団法人 大学出版部協会
ISSN 0913-3305
振替 00170-8-389131

〒102-0073
東京都千代田区九段北1丁目14番13号
メゾン 萬六403号室
TEL 03-3511-2091 FAX 03-3511-2092
E-mail: mail@ajup-net.com
URL: <http://www.ajup-net.com/>

表紙デザイン: 阿部卓也

一般社団法人 大学出版部協会 加盟出版部一覽

■ 北海道大学出版会

〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目
北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

■ 弘前大学出版会

〒036-8560 弘前市文京町1番地
弘前大学附属図書館内
TEL 0172-39-3168 FAX 0172-39-3171

■ 東北大学出版会

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1
東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

■ 流通経済大学出版会

〒301-8555 龍ヶ崎市平畑120
TEL 0297-60-1167 FAX 0297-60-1165

■ 聖徳大学出版会

〒271-8555 松戸市岩瀬550
TEL 047-365-1111 FAX 047-363-1401

■ 慶應義塾大学出版会

〒108-8346 港区三田2-19-30
TEL 03-3451-3168 FAX 03-3451-3124

■ 専修大学出版局

〒101-0051 千代田区神田神保町3-10-3
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

■ 大正大学出版会

〒170-8470 豊島区西果嶋3-20-1
TEL 03-3918-7311 FAX 03-5394-3038

■ 玉川大学出版部

〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

■ 中央大学出版部

〒192-0393 八王子市東中野742-1
TEL 042-674-2351 FAX 042-674-2354

■ 東京大学出版会

〒153-0041 目黒区駒場4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991

■ 東京電機大学出版局

〒101-0047 千代田区内神田1-14-8
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

■ 法政大学出版局

〒102-0073 千代田区九段北3-2-3
法政大学九段校舎内
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

■ 武蔵野大学出版会

〒202-8585 西東京市新町1-1-20
武蔵野大学構内
TEL 042-468-3003 FAX 042-468-3004

■ 武蔵野美術大学出版局

〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7
TEL 0422-23-0810 FAX 0422-22-8309

■ 明星大学出版部

〒191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

■ 早稲田大学出版部

〒169-0051 新宿区西早稲田1-9-12
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

■ 関東学院大学出版会

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL 045-786-5906 FAX 045-785-9572

■ 東海大学出版部

〒259-1292 平塚市北金目4-1-1
TEL 0463-58-7811 FAX 0463-58-7833

■ 名古屋大学出版会

〒464-0814 名古屋市中千種区不老町1
名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

■ 名古屋外国語大学出版会

〒470-0197 日進市岩崎町竹ノ山57
名古屋外国語大学内
TEL 0561-75-2503 FAX 0561-75-1723

■ 三重大学出版会

〒514-8507 津市栗真町屋町1577
三重大学総合研究棟Ⅱ3階
TEL 059-232-1356 FAX 059-253-3095

■ 京都大学学術出版会

〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町69
京都大学吉田南構内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

■ 大阪経済法科大学出版部

〒581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL 072-941-9129 FAX 072-941-9979

■ 大阪大学出版会

〒565-0871 吹田市山田丘2-7
大阪大学ウエストフロント
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1617

■ 関西大学出版部

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-0238 FAX 06-6389-5162

■ 関西学院大学出版会

〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-53-7002 FAX 0798-53-5870

■ 広島大学出版会

〒739-8512 東広島市鏡山1-2-2
広島大学図書館内
TEL 082-424-6226 FAX 082-424-6211

■ 九州大学出版会

〒814-0001 福岡市早良区百道浜3-8-34
九州大学産学官連携イノベーションプラザ
305
TEL 092-833-9150 FAX 092-833-9160